

〔公開の範囲〕

美術館として公開するのは1階のみ。2階の座敷（青貝・扇の間他）は特別公開として予約制で行いますが、2階のみの見学は不可。

- ①台所全体 ②中戸口玄関前 ③網代の間
④主庭（縁側から）⑤松の間 ⑥島原文芸資料室 ⑦もてなしの文化展示館



臥龍松の庭（京都市指定名勝）

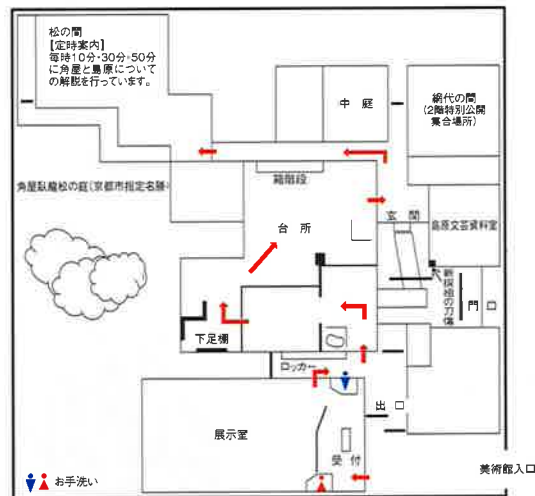


網代の間（重要文化財）



台所（重要文化財）

〔館内見取り図〕



〔公開の期間と料金〕

- 開館期間 3月15日～7月18日
9月15日～12月15日
- 開館時間 午前10時から午後4時まで
- 休 館 日 月曜日（祝日の場合翌日）
12月16日～3月14日と7月19日～9月14日
- 入 場 料 一般（大学生を含む）1000円 中高生 800円 小学生 500円
*2階特別公開の座敷（青貝・扇の間等）は1日4回（10:15、13:15、14:15、15:15）、各回20名様までの予約制です。
ご案内は約30分。事前にお電話でお申込みください。
料金は入場料のほか別途必要です。
大人800円、中高生600円（小学生以下お断り）

〔交通〕

- 阪急電車四条大宮駅
市バス207番206番：島原口下車、花屋町通りを西へまっすぐ突きあたり（徒歩10分）
- JR京都駅
市バス205番：七条壬生通下車、壬生通りを北へ、正面通り（一つめの信号）を西へ、突きあたりの公園を北へ（徒歩10分）
- JR丹波口駅
千本通りを高架線沿いに南へ、西門から入る（徒歩7分）
- 観光バス（駐車場）
観光バスは五条通りから千本通りを南行、住吉神社向かい側の駐車場（予約制）を確保しております。（ただし、平成29年1月7日～3月14日の期間は定期観光バス専用となり、一般の観光バスは駐車できません。）



※千本通りからご来館いただく際、平日午前中は中央市場の営業時間中につき、構内車両の出入りが多いので充分ご注意ください。
※高さ3.5m以上の大型バスは千本通りを七条方面に抜けられませんが、住吉神社前付近にて方向転換して五条通りへお戻りください。
※自家用車でご来館は、ご遠慮願います。

公益財団法人 角屋保存会

〒600-8828 京都市下京区西新屋敷揚屋町32
電話075-351-0024 FAX075-343-9102
ホームページ <http://sumiyaho.sakura.ne.jp>



※「もてなし」とは、客人を馳走・歓待するという意であります。

島原^{すみや}と角屋

島原

島原は、江戸期以来の公許の花街(歌舞音曲を伴う遊宴の町)として発展してきた町です。官命により、寛永18年(1641)に島原の前身である六条三筋町から現在地の朱雀野に移されました。その移転騒動が、九州で起きた島原の乱を思わせたところから、「島原」と呼ばれてきましたが、正式地名は西新屋敷といいます。島原は、単に遊宴を事とするにとどまらず、和歌俳諧等の文芸活動が盛んで、ことに江戸中期は島原俳壇が形成されるほどの活況を呈していました。しかし明治以降の島原はすっかりさびれてしまい、現在では、揚屋(今の料亭にあたる店)であった「角屋」と、置屋(太夫や芸妓を派遣する店)の「輪違屋」、それに島原入口の「大門」(慶応3年・1867年再建)のわずか3箇所が往時の名残をとどめるのみとなっています。

角屋

角屋は、島原開設当初から連綿と建物・家督を維持しつづけ、江戸期の饗宴・もてなしの文化の場である揚屋建築の唯一の遺構として、昭和27年(1952)に国の重要文化財に指定されました。

揚屋とは、江戸時代の書物の中で、客を「饗すを業とする也」と定義されているところによると、現在の料理屋・料亭にあたるものと考えられます。饗宴のための施設ということから、大座敷に面した広庭に必ずお茶席を配するとともに、庫裏と同規模の台所を備えていることを重要な特徴としています。

所蔵美術品では、昭和58年(1983)に蕪村筆「紅白梅図屏風」が重要文化財に指定されました。また、平成元年(1989)には財団法人角屋保存会が設立され、以来、角屋の重要文化財建造物と美術品等の保存と活用がおこなわれています。さらに、平成10年度からは、「角屋もてなしの文化美術館」を開館して、角屋の建物自体と併せて所蔵美術品等の展示・公開を行うことになりました。

平成22年4月1日付けで、角屋の庭が「京都市指定名勝」に指定されました。



与謝蕪村筆「紅白梅図屏風」(重要文化財)
4曲1隻の屏風はもと襖絵で、角屋2階の梅の間を飾る4面の襖絵とともに同家の仏壇の間に入っていたものである。島原は江戸中期京都俳壇の一核をなし、ことに角屋6、7代目は俳諧に造詣深く、角屋は京坂のみならず諸国の俳人が足繁く出入りして、さながら当代俳壇の一大拠点の観を呈していた。7代徳野は炭太抵・蕪村の直接の薫陶を受けており、こうした交友のなかにかかる作品が生まれたことに気づきたい。

(狩野博幸編著「角屋名品図録」より抜粋)



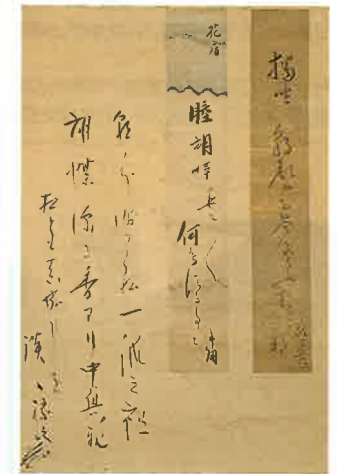
柳蒔絵膳碗揃



梅蒔絵三味線



グラヴール阿蘭陀人に挿花文脚付
ガラス杯・カットガラス栓付瓶



芭蕉・其角短冊、淡々極め



太夫彈琴図



青花牡丹唐草文細水指

(左記図版資料は常時展示しておりません。)